

あの朝青龍が出迎えてくれた 【モンゴル・日本、国交樹立 45 周年記念 日本伝統手打ち蕎麦祭り】 に日本代表で参加して

— 蕎麦がつなげる交流が一層深まることを祈念する

江戸ソバリエ・ルシック 平林知人

「わあ！でっけいなあ 懐かしいなあ！」

その記念イベントに姿を見せたあのやんちゃな(失礼!)元横綱朝青龍に、私たちは見上げながら揃って歓声を上げた。

全麵協が主催する 39 人の超豪勢な日本蕎麦業界を代表するメンバー(少し例外もいるが・笑)が揃い、事務局が主体となって下打ち合わせ等の周到な準備がありイベントに備えた。

ウランバートル市内の中心にあるメイン会場(KRONE)に於いて二日間に亘る「日本伝統手打ち蕎麦祭り」は、その初日は招待者 300 名を対象に温かい「ぶっかけ天ぷら蕎麦」を、二日目は盛大なセレモニーを済ませた後、市民約 1000 名の一般客を対象に日本の蕎麦粉による醤油仕立てバージョンと、モンゴル仕立てバージョンの二本立てで臨んだ。総合力でどちらがどう評価されたか、定かではないが盛り付けを担当していた雰囲気や感触では八対二ぐらいか。評価を受けるのが目的ではないがとても気になった。厨房内外のフットワークのいい元気印の若い男女モンゴリアンに共通の英語通じてそっと聞いたりした。賄い蕎麦を食べる時の表情や、興味の示し具合などからして、日本バージョンに心を奪われていたように感じたのは私だけではないだろう。



蕎麦祭り



モンゴル国地図

さて、ここでモンゴル国を少し紹介しましょう。

この国のイメージはまず、相撲がめっぽう強い(大相撲力士が 32 名いるそう)、ジンギスカン、蒙古斑(わが子の青いお尻を想像してください)、騎馬民族、ゲル(移動住居)などであろう。

今回も会う人々と馴染んでくるに従って、人懐こい表情や振る舞いに親しみが自然に出てきた。

受け入れ側の細やかな配慮も頂き、少ない時間の中では有ったが、モンゴル国を理

解する為には打ってつけの民族博物館や、美術館を案内していただいた。延々と続く草原をヒュンダイの車で砂煙を背に羊、山羊、小ぶりの馬の群れを車窓に眺めながらチンギス・ハーン像テーマパークにも足を延ばせた。郊外の日本人の慰霊碑(タンバルジア墓地)も訪問できた。圧巻は国立ドラマ劇場の人族芸能であった。特有の弦楽器(馬頭琴)や人間楽器(ホーミー)には思わず息を飲んだ。



チンギス・ハーン像

最後に食文化が面白い。夏は赤い食べ物で肉、冬は白い食べ物でバター、チーズである。飲み物はアルヒ(ウオッカ)が中心だが、不思議なものに馬乳酒(アイラグ)の存在がある。こんな妙酒に鼻を背けるご仁も居る。草原を大切に作る民族、だから畑にして耕作することは草原の大地を傷つけることになる、私たちの農耕民族と物事の哲学が対極にあることを今回の旅で知った。貴重な体験であった。



書けば尽くせないほど紹介したいモンゴル国の魅力や裏話(東京の忘年会で再会しようと提案のあった朝青龍についてなど)もないではないが、この辺でペンを置きます。また機会を見て別な場所で案内をします。興味があれば私まで申し出くだされば幸いです。読んでくれて バイラルラー^^♪

以上